



企画展 「人権尊重のまちづくり」

～～市民意識調査から～～

2013 年 1 月 18 日 (金) ～ 3 月 24 日 (日)

福山市は、まちづくりの基本理念に「人間環境都市」を掲げ、恒久平和の維持、基本的
人権の尊重、市民本意の行政を推進しています。とりわけ人権の尊重に関しては、「だれ
もが自己実現のための努力を妨げられることのない地域社会」、「人権を基底とした行動が
日常的に行われる地域社会」の実現、すなわち「人権文化が根付いた地域社会の実現」を
めざしています。

この企画展では、社会問題が深刻化する中で、市民の人権意識、特に同和問題に関する
意識がどう変化してきたかを把握し、市民啓発や人権教育を進めていく上での課題を明ら
かにするため、2003 年と 2010 年に実施した意識調査を比較・検討しました。

・住民学習会

1979 年からはじまった住民学習会について、「参加したことがない」人が約 5 割を占め、
その理由として、「知らなかった」が 6 割弱になっています。参加した人の感想は、約 7 割
が「有意義であった」と肯定的に評価しています。また、参加回数が多い人ほど、職場や
地域の中で差別的な言動があったとき、「自分で間違いを説明する」が多くなっています。

・同和問題の認知

同和問題を初めて知った時期は、全体では「中学生の頃まで」が約 6 割を占めていますが、
20 歳代では 5 割となっています。また、「同和問題を学校で習った」人の割合も、40 歳代
の 64.6%から、30 歳代は 58.4%、20 歳代は 45.4%と減少し、逆に「知らない」という人は、
40 歳代の 3.2%から 20 歳代では 21.3%と増加しています。同和問題との出会いが、子ども
たちの自立にむけた動きを後押しするものではなく、家族・地域・職場など、誤解や偏見の
入り易い経路になっていることが危惧されます。

・同和問題についての意識や関心

同和地区出身者に関する人権問題（部落差別）が「ある」と思っている人は 51.3%で、
前回調査の 81.8%から大幅に減少し、逆に、「わからない」が 44.9%（前回 17.1%）と増
加しており、この傾向は 40 歳代・30 歳代・20 歳代と、若い年齢層ほど顕著になっています。

また結婚について、約 8 割の人が差別はあると答えています。結婚や就職の際の身元
調査について、「当然のこと」（10.2%）・「よくないことだと思うが仕方がない」（48.5%）
と、身元調査を肯定する人の割合が約 6 割弱を占めています。人権啓発や人権教育の
継続した取組が、ますます重要になっています。

人権学習の授業にふれ、熱い気持ちになりました。

三重県から、中学校の先生が一人で来られました。校内の研究授業で行う人権学習についていま悩んでおり、そのヒントを得るために見学に来たとのことでした。

人権展示を見ながら、「水平社宣言を解説するような授業ではなく、山田少年の立ち上がり」に視点を当ててはどうか」など、中学生が見学に来たとき話す内容を説明しました。

その後、「先生の授業、うまくできたかな」と気にしていたところ、手紙と一緒に、指導案や授業風景の写真、生徒の考えが書きこまれたワークシートのコピーなど、授業の流れがよくわかる資料が送られてきました。私たちも久しぶりに人権学習の授業参観をした気持ちになり、熱いものを感じました。その一部を紹介します。

… … 今までは「同和問題学習＝部落史、差別用語のばらまき」と、短絡的に考えてしまい、ついつい腰が引けてしまっていました。また、保護者から「同和問題学習はやめてほしい」という声があったり、授業を中傷するような発言がなされていたことを聞くと、余計に慎重になるというか、触れないでおこうと逃げていたのかもしれない。

けれども、先生の「該当生徒に下を向かせてはならない」という鉄則を、あの日うかがえたことで、授業で何を大事にしなければいけないのかについて、立ち止まって考えることができました。

部落史を教えることで、ややもすると「物知り」を育てようとしていたのかもしれない。正しく知らせれば、差別が解消するのだ、と考えていたのかもしれない。生徒の心に訴えるためには、どうすればよいのか、そのための教材でなければならないという、あたり前のことを忘れていました。

山田少年に焦点を絞って提示したおかげで、生徒の反応は格段に活発でした。福山市人権平和資料館に、生徒たちを連れて行って、先生にお話をさせていただきたい、と思いながら授業をさせてもらいました。

一つの授業で、すぐに効果があがるほど、簡単なものではないことは、私たち教師も、そして受けている生徒たちも、お互いにわかっています。

日ごろの何気ない行動や振る舞いに、生徒の成長がみられるように、そして生徒が世の中に出たときに、声を上げることができるように、今後もできることを積み重ねていきたいと思います。あと三ヶ月余りで、義務教育を終える目の前の生徒たちに、教師だからできることを見つけていきたいと思います。

とはいえ、正直なところ、落ち着いた学年・学級集団とは言えません。躰を含め、身につけるべきこと、正していくべきことがまだまだたくさんあります。さまざまな課題もあります。「一事が万事」だな、と感じることがよくあります。だからこそ逆に、生徒たちの特性にフィットする何かを、見つけていけばよいのだと、今回の授業を通して気づかされました。こちらの型枠にはめ込むことばかりに、気をとられていたようです。

先生とお話させていただき、学ぶことの楽しさを久しぶりに感じたひとときでした。

これからも、三重県でがんばります。



山田少年の訴え